The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	批判的社会言語学の現在　はしがき
Author(s)	
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2023, 2022, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91563
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

はしがき

本プロジェクトは『批判的社会言語学の諸相』（2002 年度）、『批判的社会言語学の可能性』（2003 年度）、『批判的社会言語学の射程』（2004 年度）、『批判的社会言語学の展開』（2006 年度）、『批判的社会言語学の課題』（2007 年度）、『批判的社会言語学の実践』（2008 年度）、『批判的社会言語学の展開』（2009 年度）、『批判的社会言語学の領域』（2010 年度）、『批判的社会言語学の方法』（2011 年度）、『批判的社会言語学の構築』（2012 年度）、『批判的社会言語学の展望』（2013 年度）、『批判的社会言語学の軌跡』（2014 年度）、『批判的社会言語学の潮流』（2015 年度）、『批判的社会言語学のまなざし』（2016 年度）、『批判的社会言語学のメッセージ』（2017 年度）、『批判的社会言語学の思潮』（2018 年度）、『批判的社会言語学の探訪』（2019 年度）、『批判的社会言語学の対話』（2020 年度）、『批判的社会言語学の深化』（2021 年度）の延長線上にある。また、『「正しさ」への問いー批判的社会言語学の試み』（野呂香代子・山下仁、三元社、2001、新装版 2009 年）、『「共生」の内実ー批判的社会言語学からの問いかけ』（植田晃次・山下仁、三元社、2006、新装版 2011 年）、『ことばの「やさしさ」とは何かー批判的社会言語学からのアプローチ』（義永美央子・山下仁、三元社、2015 年）とも深い関連を持つ。さらに、2012 年度から全学的に開始され、山下が運営統括委員、植田がプログラム担当者に名を連ねていた「未来共生リーディングプログラム」とも関連を持つものである。

2002 年に開始された本プロジェクトの出帆より 20 年あまりの歳月が流れた。この間、幾多の論文･翻訳によって、上掲のように「批判的社会言語学」の「諸相」・「可能性」・「射程」・「展開」・「課題」・「実践」・「領域」・「方法」・「構築」・「展望」・「軌跡」・「潮流」・「まなざし」・「メッセージ」・「思潮」・「探訪」・「対話」・「深化」に取り組み、今年度は「現在」をテーマとした。

本プロジェクトは、混沌とした現代社会を「言語」と「社会」の関係を扱う社会言語学の立場から、研究者それぞれのテーマから掘り下げ、理論や環境の変遷を経た「現在」を探しながら批判的に論じようとするものである。

呉論文は、近年グローバリゼーションの潮流下において台湾政府が推進している「バイリンガル国家政策」に焦点をあてたものである。まず、バイリンガル国家政策の目標、実施計画や施策を概観するとともに、該当政策で言う「バイリンガル」とは何かについて検討している。その後、筆者の身近なところから収集した事例と先行研究を通してバイリンガル国家政策の推進による教育現場への影響を紹介している。

山下論文は、ミシェル・フーコーの「装置」概念をもちいたジークフリート・イェーガーの装置分析の可能性について考察したものである。まず「協調的とはいえないコミュニケーション」を研究対象にする上では、現実の社会問題を出立点にする必要があることを確認するため、ウルリヒ・アモン、カール・マルクス、ノーマン・フェアクラフの見解を取り上げ、次に具体的なドイツ語の例文をもとにミクロ社会言語学的研究の枠組みにおける理論的な議論の限界

について議論する。さらに、批判的談話分析(以下、CDA)及び批判的談話研究(以下、CDS)を概観した後、ジークフリート・イェーガーの装置分析の特徴を説明し、野呂香代子のメルケル批判を紹介して、装置分析の可能性を考察する。

周論文は社会言語学的なアプローチ（ナラティブ分析）を援用し、身体障害と精神障害両方のある当事者の語りを取り上げ、障害者同士の捉え方及びその捉え方の背後に働く社会的規範を調査した。結果として、障害者同士においての 2 つの序列化が確認できた。1 点目は、精神障害者の間で就労を指標とした序列化、すなわち、能力主義を中心とする健常者中心主義である。2 点目、当事者の語りで可視的なインペアメントの有無（見える・見えない）を指標とした障害の序列化も観察された。

上田の研究ノートは、主に社会言語学分野で扱われてきた「言語と方言の識別」という問題、すなわち言語変種の地位に関する「これは言語なのか方言なのか」という問いについて、どのような点で恣意的な判断が介入するのかをメタ的な観点から論じている。そして、上述の問いが恣意性の関与なしには答えられないと指摘している。

植田の研究ノートは、残された学習書を手掛かりとして、敗戦から日韓国交正常化までの間に日本人がいかに朝鮮語を学んだのかの一端を概覧したうえで、奥山仙三・相場清・梶井陟の 3 人を取りあげ、「旧朝鮮語学」の学習書の「戦後」の朝鮮語の学習書への流用という行為から「旧朝鮮語学」と戦後の朝鮮語教育との断絶と連続性について簡単な検討を試みた。

読者の皆様からの忌憚なきご意見、ご批判などをお伝えいただけたら幸いです。

執筆者一同